

18 世紀ウェールズの古物研究とバンティングの古代音楽

寺本圭佑

The influence of the eighteenth-century Welsh antiquarians on Bunting's 'ancient music'.

Keisuke Teramoto

Being the first to transcribe and preserve traditional Irish harp music Edward Bunting's (1773–1843) three published collections and manuscripts are now regarded as primary sources for the revival of lost Irish harp music. The word 'ancient' is often used, which we see when observing his works' titles.

In around 1613, Robert ap Huw of Anglesey (c.1580–1665), a Welsh bard, compiled harp music to conserve the bardic tradition. In the 1720s, the Welsh antiquarian Lewis Morris (1701–1765) discovered Robert ap Huw's manuscripts. Shortly after, the manuscripts aroused interest and attention among scholars and musicians, such as Charles Burney (1726-1814) and Edward Jones (1752-1824) who considered the the ap Huw manuscripts ancient druidic music. Bunting met them in London and studied the manuscripts. In the preface to Bunting's collection (1809), he quoted this manuscripts in order to emphasize the antiquity of Irish harp music. Discovery of ap Huw manuscripts by Morris prompted Bunting's interest in ancient music.

keywords: ancient music, harp, antiquarian, Bunting, Robert ap Huw

Edward Bunting (1773-1843) はアイルランドのハープ奏者が口頭で伝承していた音楽を初めて楽譜に書きとった人物である。彼はその成果を次の 3 巻の曲集として出版した。① *A General Collection of the Ancient Irish Music* (1796)、② *A General Collection of the Ancient Music of Ireland* (1809)、③ *The Ancient Music of Ireland* (1840)。タイトルに着目すると、すべてに「古代 ancient」という少しおおげさな表現が用いられている。彼はいかにして古代音楽の保存に関心を持つようになったのか、その動機をウェールズの古物研究に探ることを本稿の目的とする。

ウェールズでは、アイルランドと比べるとかなり早い時期から、古代音楽の保存と研究への関心が高まっており、16 世紀のバード（職業的詩人、音楽家）たちは音楽に関する理論書を編纂していた。とりわけ具体的な楽譜資料として後世に大きな影響を与えたのが、1613 年頃にアングルシー島のバード Robert ap Huw (c.1580-1665) が編纂した手稿譜である。彼は口頭で伝承されていたバードの古代音楽を保存するために、ハープの調弦法や装飾法に関する記述も残

している。

ウェールズの古いバード音楽の伝統は、1665年のアップ・ヒューの死によって、一度途絶えてしまった。17世紀中葉には、大陸からトリプル・ハープという新しい楽器がウェールズにもたらされ、アップ・ヒューが演奏していた古いハープに取って代わってしまった。それと同時に、アップ・ヒューが継承していた古いレパートリーも忘れられてしまったのである。

1720年代にアングルシーの古物研究者 Lewis Morris (1701-1765) によって『アップ・ヒュー手稿譜』が再発見される。この時、同手稿譜に記された音楽を理解できるものはいなかった。モリスは同手稿譜にウェールズの「古代音楽」が記譜されていると信じていた。

1741年にウェールズ人ハープ奏者 John Parry of Ruabon (1710-1782) が *Antient British Music* という曲集を出版する。パリーの曲集の序文には、ウェールズの音楽史が記されている。実はこの序文を書き、パリーの音楽と古代ドウルイドを結び付けていたのはモリスだった。

『アップ・ヒュー手稿譜』は、パリーや音楽学者 Charles Burney (1726-1814)、ペダル・ハープ奏者であり古物研究者でもあった Edward Jones (1752-1824) らによって調査され、研究書に取り上げられた。これにより、ウェールズの古代音楽に対する関心はさらに高まっていった。

ウェールズで古代音楽の流行が始まった18世紀前半の 아일랜드 やスコットランドでは、アップ・ヒューと同時代人の Rory Dall O’Cathain (c.1550-c.1650) による古いハープ音楽も含まれる曲集が出版されていたが、タイトルには古代音楽を強調する表現は用いられていなかった。アイルランドやスコットランドで、古代音楽が出版されるようになるのは、18世紀後半からだった。

1796年にバンティングは最初の曲集を出版した。バンティングは自分が収集したハープ音楽の古さを強調しており、その大半が古代起源であると主張している。アイルランドでは、この曲集が出版された2年後の1798年に大規模な反乱が起こる。バンティングの序文は、当時の急進的な愛国心に起因しており、そこには英国に対するあからさまな反感が認められる。彼はアイルランドが、ハープ音楽の伝統と独自性によって、英国に優越していることを強調しようとしていたのである。

バンティングは1809年に2巻目の曲集を出版する。この頃のバンティングの書簡が残されている。それによると、彼は出版準備のためにロンドンを訪れ、ジョーンズやバーニーと交流を深め、『アップ・ヒュー手稿譜』の調査も行っていった。同手稿譜には「24のメジャー」というウェールズの古い音楽理論が記されている。ウェールズの伝説によると、メジャーは11世紀頃にアイルランドで制定され、アイルランド語で書かれたと言われている。バンティングはこの点に着目し、アイルランド語による翻訳を序文に掲載している。バンティングは、『アップ・ヒュー手稿譜』を援用して、アイルランド音楽の古さを強調しようとして

いたのである。

その後、バンティングは最後の曲集を 1840 年に出版する。これは彼のハープ保存活動の集大成ともいえるもので、100 ページにおよぶ序文がある。151 曲中 93 曲に “very ancient, author is unknown” という但し書きがある。その真偽を確かめることは不可能だが、彼は「古代音楽」という言葉を用いることによって、意図的に楽曲の由来を曖昧なものにしようとしていたのである。

最後の曲集には、アイリッシュ・ハープの調弦法や装飾法など、実践的な側面が詳しく記されるようになった。アイリッシュ・ハープに関するこのような具体的な情報が記録されたのは、これが初めてであった。

彼がこの曲集を出版した時、ハープ音楽の伝統は今にも途絶えようとしていた。彼はハープ音楽保存のために 2 つのハープ協会を設立していたが、どちらの協会もこの曲集が出版される年までに解散してしまった。バンティングが記録した実践的な資料を用いるハープ奏者は、ほとんど存在しなかった。つまり彼は最後の曲集を、後世に向けたハープ音楽保存の目的で出版していたのである。それは、17 世紀にロバート・アプ・ヒューが置かれていた状況と似ていた。彼はウェールズのハープ音楽独自の調弦法や装飾法、レパートリーについて記録していた。バンティングはかつて『アプ・ヒュー手稿譜』を調査した経験を思い出して、アイリッシュ・ハープに関する具体的な情報を記録したのかもしれない。

バンティング以降、19 世紀のアイランドでは民謡収集がさかんに行われるようになり、古代音楽の出版が流行するようになる。バンティングはウェールズで古代音楽を流行させたルイス・モリスと同様の役割を果たしていたのである。16 世紀以来のウェールズ人バードによる古代音楽の保護に対する関心は、18 世紀のウェールズの古物研究家に継承されていた。モリスの『アプ・ヒュー手稿譜』の再発見に由来する古代音楽の流行のうねりは、18 世紀末アイランドのバンティングにまで影響を与えていたのである。